

序

『立命館アジア・日本研究学術年報』第5号をお届けします。

執筆・査読・編集・刊行のすべてのプロセスにおいてご支援ご協力をいただいた皆さまに、心より深謝申し上げます。

長らく続いたコロナ禍に対する感染防止の施策が終わって1年がたち、その間に、国際的にも国内的にも、ポストコロナ時代を模索する動きがさまざまな場所でありました。研究や教育の現場でも、新しい時代を築くための尽力が続けられています。

私たちの立命館大学では、「学園ビジョン R2030 立命館大学チャレンジ・デザイン」というビジョンを掲げる中で、次世代研究大学をめざしており、ポストコロナ時代の種々の努力も、このビジョンの諸目標をめざして展開されています。アジア・日本研究所にとっては、特に「社会共生価値の創造」をアジアと日本の間で実現していくことが、大きな目標となっています。本誌も、その役割を担う一環として、皆さまのご支援ご鞭撻をいただきながら、しっかりと前に進んでいきたいと存じます。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

さて、コロナ禍によって研究に困難が生じる中で、それを乗り越える方法の一つは、研究 DX（デジタルトランスフォーメーション）でした。国際的な人流が妨げられる中でオンライン研究集会を開催することや、フィールドワークが困難な中でサイバー空間上のデータを活用する研究手法を開発することなどが、DX の実践例として理解することができます。DX のもう一つの形として、アジア・日本研究所では、研究成果の発信の手法の面で『アジア・マップ：アジア・日本研究 Web マガジン』を 2023 年に創刊いたしました。今年は、本誌の編集・制作と並行して、その Vol.2 を刊行しています (https://www.ritsumei.ac.jp/research/aji/asia_map_vol02/)。

これは Web 上に作られた年刊の学術マガジンという位置付けで、Web 上にありますからハイパーテキストとして公開されています。アジア地図の上から、どこかの国をクリックすると、総説やエッセイ、読書案内、年表など、アジアを研究する専門家の成果発信が掲載されているページに行きます。これがなぜ、DX かと言えば、この「学術マガジン」は ISSN を取得した定期刊行物として発行され、執筆者の業績として提示できるような書誌情報も整えているからです。(ISSN 2759-5110) つまり、本誌もそうであるような学術誌のオンライン刊行という形態から、さらにはみ出るような新形態を模索して、これを創刊しました。現在のところ和文版が主ですので、本誌の姉妹誌として、是非ご覧下さい。

本誌は、「立命館〔における〕アジア・日本研究〔の〕学術年報」という題名の通り、立命館学園におけるアジア・日本研究の毎年の成果をお知らせすることをめざしており、その一環として、論文、研究ノート、研究報告を掲載するほか、書評欄では、立命館大学、立命館アジア太平洋大学の教員、研究者を中心とする編著者によるアジアや日本に関する書物を取り上げ、好評をいただい

おります。本号からは英語の編著書も、ご希望があれば対象とすることにいたしました。充実したラインナップで、立命館学園でのアジア・日本研究の広がりを実感いただけるならば、嬉しい限りです。

本誌は、今号も、オンライン版（デジタル版）と、従来型のプリント版（アナログ版）で発行しております。研究所としてDXは推進するものの、図書館での利用などを考えると、プリント版の価値は健在です。コロナ禍でデジタル化の重要性がはっきりする一方、デジタル化の進行によって、私たちの社会や生活の中のアナログ的な部分の重要性に対する認識も増してきたかと存じます。

掲載内容は、研究論文、総説論文、研究ノート、研究サーベイ、研究報告、書評のいずれのカテゴリーでも、「学際性」「文理融合」を重視して、人文・社会科学系、自然科学系の多様な分野に対応するように努めております。なお、学際性という理念は総体的なものであり、個別の論文がいずれかのディシプリンに特化していても、アジアや日本に関わりのある研究であれば、どの分野の投稿でも歓迎いたします。是非、研究成果の発表の場としてご活用ください。

今後とも、本誌を含めて、国際的なレベルでの「アジア・日本研究」を推進する諸活動にいつでものご支援、ご鞭撻を賜りますようお願いする次第です。

2024年8月

小杉 泰

立命館大学 立命館アジア・日本研究機構 副機構長
アジア・日本研究所長、編集委員長